

# 誰も書かなかった アメリカ映画史

——ハリウッドを騒がせた数々の事件

Okada Seiichi

岡田誠一



## はしがき

ロス・アンゼルス空港からダウンタウンに向かうと、素晴らしい高速道路を走ることになる。片側だけで十車線はあるのか、流石、自動車の国アメリカだと痛感させられる。これらの道路は、フリーウェイと呼ばれるハイウェイで料金は只だ。ロスはもの凄く広い都会なので、車がなければどうしようもない。ロス市民にとっては、夕飯を食べるためフリーウェイを一時間位走るのは当たり前のことだと聞く。

この都会は雨が少ないことでも有名だ。一年で雨が降るのはわずか十日間位だそう。その結果、自動車の排気ガスが空中に漂いつづけ、排気ガス規制の行なわれていなかった四十年ほど前までは、「白いスモッグ」がロスの特徴となっていた。

さて、雨が少なく日照時間が長い都会ということで、ロスにある産業が栄えることになった。それは何であろうか。車をしばらく走らせ、周囲を見回しているうちにそのヒントが見つかる。それは四十〜五十キロ離れた所からも見えるくらい大きな看板だ。小高い山の中腹に、HOLLYWOODと九つの文字が横に並んでいるが、これはハリウッドサインと呼ばれている。一文字の大きさは、高さ十四メートル、幅九メートルだそう。かつて、あるイギリス人女優が、Hのてっぺんまで作業用梯子はしこで登り、飛び降り自殺をしたという。

そう、これでお判りのことと思うが、雨の少ないロスに出現したある産業というのは、映画産業だったのである。初期の映画撮影機は、まだ性能がそれほど良くなかったので、明るい自然光を必要とした。それ故、夏にはまばゆいばかりの太陽光が降りそそぐロスアンゼルスの一画ハリウッドが、映画の都として繁栄することになったのだ。

では、どうしてハリウッドと呼ばれるようになったのか。一八八六年のことだが、ウィルコックスという名前の不動産業者がカンザス州からカリフォルニア州へと移ってきた。彼が買い求めた土地にはholly（ひいらぎ）がたくさん生えていた。このことから、ウィルコックス夫人がその土地をHOLLYWOOD（ひいらぎの森）と名付けたというのである。

だが、実際には、気象だけを条件としてハリウッドが出来上がった訳ではなかった。映画の都誕生には、いくつかの理由が錯綜しているのである。

この本では、まず、日本における映画について述べることにする。映画は外国で発明されると間もなく日本に入ってくるが、その頃、巷における人びとの反応はどのようなものであったのか。トーキーの出現、カラー映画の登場などを経て、やがて映画は黄金時代を迎える。最初の章では、日本映画の変遷を辿ることにしたい。

次の章から六人の人物を扱うが、彼らはいずれもハリウッドの歴史において重要な役割を演じた人たちだ。彼らを組上に載せることにより、もはやセピア色に色褪せてしまった、往時のハリウッドを描き出すのがこの本の目的である。まず、発明王エジソンと映画との関係について述べ、ハリウッドを生んだのは実はエジソンだったということに触れてみる。

その次の章では、セダ・バラというエキゾチックな名前の女優を扱う。彼女はマスコミによって無理やり「魔性の女」に仕立て上げられた、ごく普通のアメリカ人女性だったのだ。映画界で巧みに用いられた宣伝により、有名女優にさせられた第一号だったのである。

次にロスコー・アーバックルという名前のデブの喜劇俳優を扱うが、彼が引き起こしたレイプ事件が主な原因となり、映画界はヘイズ・コードによる自主規制の時代に入っていくのだ。実際、彼の所為で、不自然な映画が長い期間に亘って作られることになってしまった、といえるのである。

次に扱うのは、映画とまったく関係のない経歴を持つ連中が、映画界を牛耳<sup>ぎゅうじ</sup>っていた時代に、監督の地位を世に認めさせることに見事成功した、フランク・キャプラという名前の人物である。キャプラ監督が相手にしたのは、ハリウッドで最も悪名高かったハリリー・コーンという男であった。シシリー島の寒村で貧しい農夫として一生を終えたかもしれないフランク・キャプラが、まさに運命に導かれてアメリカに渡り、ハリウッドで出世していく過程を述べる。

次に、ジョン・ヒューストンという名前の監督を扱う。彼の作った映画は、所謂<sup>いわゆる</sup>ヒューストンらしさというものに欠けていたが、それは何故だったのか。実は、彼の幅広い人間性、知的な人と高度なことを語り合い、無教育な人たちとも対等につき合うことができる彼の性格的柔軟さ、がその映画作りに大いに関係していたのである。

最後に扱う人物は、ハリウッド史上最も有名な女優といってもよいマリリン・モンローである。彼女に関しては、おつむの弱い、超セクシーな女というイメージが出来上がっているが、それは必ずしも正鵠<sup>せいこく</sup>を射ているとは言えない。信じられないことではあるが、モンローは実は繊細な内気な面も備えていた、ということはこの章で述べる。そして、彼女の死についてだが、種々様々ある説の中でどれが最も真実に近いのかを検証してみたい。

最後の章で、ハリウッドが置かれている今日の状況、ハリウッドに追いつき、追い越そうとしている他の国々の映画産業について述べることにする。ウエリウッド、ノリウッド、ボリウッドなどと呼ばれるアメリカ以外の国々での映画産業についてまとめてみる。そして、今日のハリウッドが直面している二つの苦悩とは何なのかを語って終わることにしたい。

誰も書かなかったアメリカ映画史

目次

はしがき 3

第一章 日本における映画 9

活動写真の頃 10

各地で映画初上映 11

映画の変遷 14

第二章 トーマス・エジソン — 黎明期の映画 17

映画の初公開 18

エジソンを助けた人たち 20

キネトスコープの内容 23

小さい頃のエジソン 25

実験が大好きな子供 28

エジソンの失策 30

エジソンの抱いた夢 32

第三章 セダ・バラ — アメリカの無声映画時代 35

五セントで観る夢 36

オアシス育ちの女 40

魔性まじょうの女出現す 42

本当の生い立ち 45

またまた宣伝係が 47

「魔性」を捨て去る夢 49

契約が切れて 51

無声映画時代とセダ・バラ 53

本当の姿 54

第四章 ロスコ・アーバックル — 喜劇俳優の悲劇 57

芸能界への道 58

彼を支えた女性ミンタ 61

友人たち 63

## 第五章 フランク・キャプラ

### —監督の地位を高めた男

81

- 若き日のチャップリン 66  
忠義の人、バスター・キートン 69  
五年間抱き続けた夢 70  
事件の後で 73  
その後のロスコー・アーバックル 76  
明るい兆し 77  
監督の中の監督 82  
アメリカへの旅立ち 84  
苦しかった日々 87  
大学時代 89  
大学は出たけれど 91  
映画界へのきっかけ 93  
スタジオを訪ねる 96  
映画の世界で 98  
コロンビアで働く 101

## 第六章 ジョン・ヒューストン

### —最初のハリウッド・ダイナステイ

129

- アカデミー賞 103  
バス旅行もの 104  
クラーク・ゲーブルが主演 106  
主演女優は誰か 109  
ヘイズ・オフィスとブリン・オフィス 111  
ハリリー・コーンと対面 113  
「ワン・マン・ワン・フィルム」とは何か 115  
コーンとの縁 117  
コーンの裏切り行為 119  
忘れられない日 122  
ハリリー・コーンという男 125  
特徴がないという特徴 130  
ヒューストンの背景 131  
水清ければ魚棲まず 134  
一番の友人 137

ボクシングに熱中	139
絵画と馬に魅せられて	142
博打と女	145
演技の経験	149
ヒューストンの文才	151
映画界で働く	153
映画監督の仕事に	155

## 第七章 マリリン・モンロー — 相反する二つの性格 159

母方の祖母、デラ	160
母親グラディス	162
ボレンダー家に預けられて	165
母親グラディスと別れて	168
孤児院と中学校	170
もう一人のモンロー	173
憧れの映画界へ	176
二本の映画にチヨイ役で	178
大スターへの道	180

## 第八章 ハリウッドと他の国々 203

ときどきノーマ・ジーンが	182
薬物、遅刻、そして自殺未遂	184
父親的イメージの男たち	188
アーサー・ミラーとケネディ	192
モンローの突然死	195
死因となった薬物	197
モンロー死去に関する諸説	200
フランスとイタリアの映画	204
東欧諸国と映画産業	206
ニュージールランドとアフリカとインド	207
これからのハリウッド	210
あとがき	214
参照した文献など	216

第一章

日本における映画



尾上松之助



『青い山脈』  
原節子と杉葉子



*Le cinématographe Lumière: projection.*



*Le cinématographe Lumière: projection.*

## 活動写真の頃

一階席の観客の上に二階から子供が落ちてきた。館内はものすごい混雑で、場内通路も場内両脇も観客で一杯、途中で便所に行くことなどまったくできない。冷房はないし、扇風機もついていないので、真夏の場内の暑さときたら、まさに想像を超えるものだった。このような混雑の中で、二階から身を乗り出していた子供が下に落ちてしまったのだ。幸いなことに怪我はしなかったが。

そして、(あー面白かったな) と思いつつ出口に向かう時の混雑は、まさにまったく乱闘さながらで、筆舌に尽くし難いものだった。羽織の紐ひもがちぎれるなどというのは日常茶飯事にちじょうちゃはんじで、下駄げたが脱げて裸足はだしで出てくる者もいた。

これは、映画評論家、淀川長治が、『淀川長治 シネマパラダイス』の中で描く、一九二〇年頃(大正時代)、子供こどものときに住んでいた神戸の映画館の様子である。このような殺人的混雑ぶりは、正月やお盆のときによく見られたという。

この頃は、「映画」を観に行くとは言わず、「活動」を観に行くと言ったそうだ。今日では考えられないことだが、隣近所すべての家の人たちが「活動」を観に行った。これは山の手の上流階級の人たちにも当てはまることだった。下町では町の辻でも銭湯の中でも、みな「活動」の話をした。

何しろ、ラジオもテレビもない時代である。娯楽といえば演劇(芝居)か浪曲か奇術、という時代だったが、舞台ものは入場料が活動写真の倍はした。だから、活動が一番安いということ、このころの映画見物は、どこの家でも家族中出かけることが多かった。町の人たちにとって、映画館は今日のスーパーマーケットのような存在で、気軽に行ける場所だったのである。その頃は、入場料も当時のタバコ一箱くらいの値段だったという。